

名画の背景——北斎と広重——

小 山 満

はじめに

遊郭での遊興、役者の芝居見物、参詣を兼ねた物見遊山。これが江戸時代の、とくに後期の人々における最大の楽しみであった。江戸の美人画、役者絵そして風景画はこのような背景の中で生まれた。小林忠氏は「そこでは誰しもが、封建的な身分制度や、非人間的な道徳律から解き放たれ、思うまま本然の情念や、美意識を追い求めることが可能であった。」と監修した『浮世絵の歴史』で指摘している⁽¹⁾。

この女性の美しさ、名優の立居振舞い、日本の自然の景観は、じつは今もって変わらない、我々の美意識における好対象である。時代的制約があるとはいえ、これらを美しい色彩版画で仕上げた数々の名作の人气が、今日も続く理由はここにあると思う。

ここでは、これらの中で最も代表的な作家の、葛飾北斎と歌川広重について述べてみよう。作品では名作「富嶽三十六景」と「東海道五十三次」に焦点を当てていく。

葛飾北斎

北斎の履歴を調べてみると、晩年を除くとほぼ20年ごとの推移がみられる⁽²⁾。

- I期……宝暦10年（1760）江戸本所割下水（墨田区亀沢1丁目北斎通り）で生まれる。本人は6歳で筆を持ったという。父は川村氏。のち御用鏡師中島伊勢の養子として育つ。その後、勝川春章に入門し春朗名でデビューし20歳まで。
- II期……大人向け黄表紙作品や洒落本、絵暦、摺物、を手がけ浮き絵の遠近法や司馬江漢の洋風画などを習い、宗理、可候号を用いた39歳まで。
- III期……北斎号を用い始め、狂歌本「東遊」を出し、護国寺で大達磨を描く。北斎45歳の文化元年（1804）に、一世を風靡した喜多川歌麿が、錦絵で大奥生活を諷刺したと咎められ入牢し、2年後に54歳で死去するという事件が起きる。この頃、滝沢馬琴の読本を数多く担当する。文化11年（1814）北斎55歳の時、絵手本「北斎漫画」（初編）で自信を深め、その後60歳まで。
- IV期……為一あるいは前北斎為一の号を用い、錦絵の傑作「富嶽三十六景」天保2年（1831）刊や、絵手本「富嶽百景」を描いていく80歳まで。当時オランダ通商で外国の画材、とくにペロリン藍の輸入で「富嶽三十六景」を完成させ、世間の注目を浴びる。広重の「東海道五十三次」の刊行はこの2年後である。
- V期……肉筆画を中心に制作する。信州の弟子高井鴻山を再三たずね、嘉永2年（1849）90歳で死去するまで。この間、天保の改革で輸入物とくにキリシタン関係の物品の所持で、親しかった柳亭種彦が拘引され、その後拷問を受けて死去する。北斎の作品に奇怪さや毒々しさが現れる点、さらに高齢での信州行きは、これと関係があると考察さ

れている⁽³⁾。墓所は父親の墓のある浄土宗の誓教寺（浅草）。

富嶽三十六景

1) 意表をつく斬新さ

北斎の「富嶽三十六景」の三大傑作とよばれる「神奈川沖波裏」「山下白雨」「凱風快晴」のうち「神奈川沖波裏」の構図（図1）は、前景の波を思い切り大きく描き、視点を低く波間に置いて、遙か彼方の富士を観る遠近法が取り入れられている。これは初期に学んだ西洋銅板画の影響によるという指摘がある⁽⁴⁾。またオランダ経由のペロ藍で最大の効果を出していることも西欧文化の摂取を十分物語っている。北斎の絵における意表をつく斬新さは、このような強固な学びの成果が基礎となっているとっていいであろう。

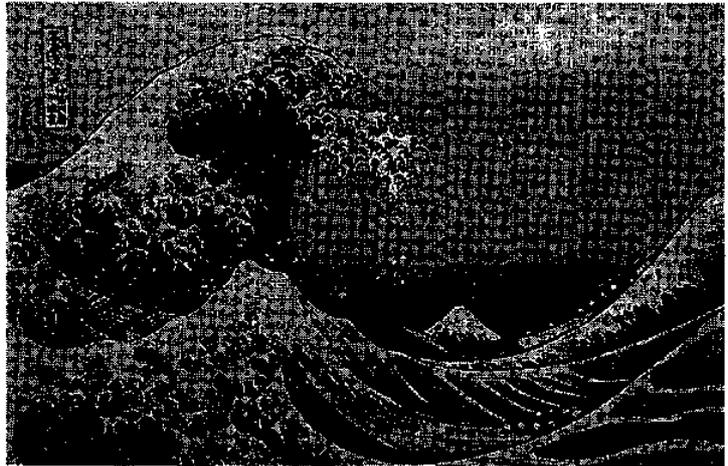


図1 北斎 神奈川沖波裏

2) 実景描写

北斎の「富嶽三十六景」にみられる富士山のフォルムは、とくに山頂を高く引き伸ばす独特のスタイルのため、実景とは別のものという解釈がなされている⁽⁵⁾。しかし「この絵は富士の形の、その所によりて異なることを示す。あるいは七里浜にて見るかたち、または佃島より眺める景など、すべて一様ならざるを著わす。」⁽⁶⁾と記した広告が残っているほか、富嶽三十六景の下に副題があり、場所が特定されることを考えると、いずれも実景描写が基本にあるとみることがいいと思う。

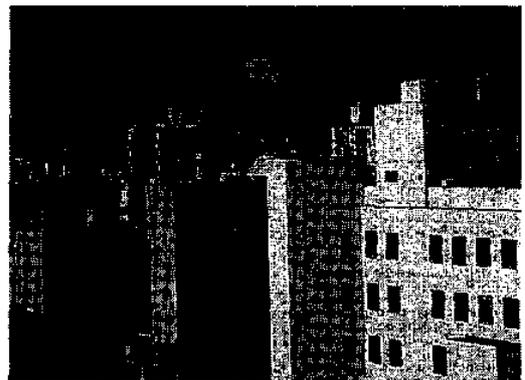


図2 田代博 横浜市中区の富士見町からの富士山

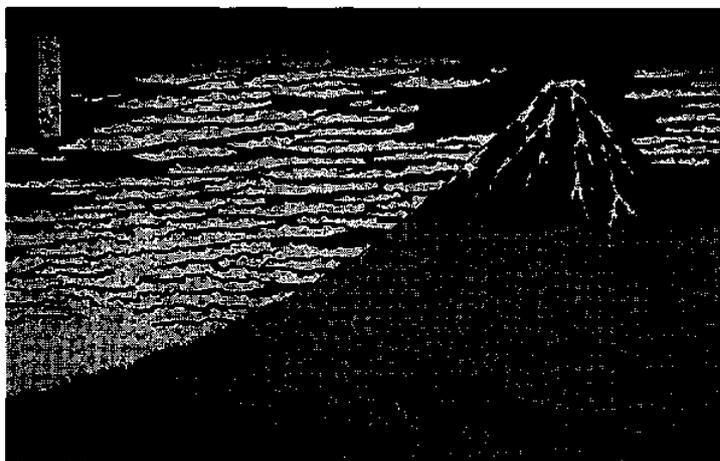


図3 北斎 凱風快晴

上記の三大傑作で見ると「神奈川沖波裏」は神奈川（横浜）沖からの富士の眺め（図2）であっていいと思われるが、残る「山下白雨」と「凱風快晴」は地名が記されていないのでどこから見たか不明とされる。確かにそうではあるが、「凱風快晴」（図3）は、絵手本「富嶽百景」の「快晴の富士」がほぼ同一の構図で描かれ、左下に湖面に小舟が幾槽か見えるため、これをヒントにして山中湖あたりという想定がある⁽⁷⁾。近



図4 冬の忍野の富士

いと思われるが、まったく湖がないことと、山上の雪解けの模様からみて、さらに東寄りの画家や写真家に人気の高い忍野あたりがふさわしいと思う(図4)。「山下白雨」(図5)の場合は、「富士宮か白鳥山あたりか」⁽⁸⁾という。三山冠の中央が高くなるので可能性はある。山梨の鳴沢でも中央が高くなるので類似性はあるが、小さな山並みを左裾野にもつ似姿では上野郷(富士宮市)からの景観が、最も近いものであろう(図6)。

3) 日蓮信仰

北斎が日蓮信仰をもっていたという証拠は、弟子の露木孔彰(為一)が描き残した「北斎翁仮宅写生」⁽⁹⁾(図7)で、娘の阿栄(応為)とともに制作に励む老人風の北斎の様子が描かれ、部屋の左隅上に、箱に入った、手に経巻を持つ一座像が見えることである。この絵を受け取った飯島虚心の『葛飾北斎伝』に、「阿栄の傍らの柱には蜜柑箱を少しく高く釘づけになして日蓮の像を安置せり」⁽¹⁰⁾と記していることで裏付けられる。

また北斎の生まれた本所割下水の近くに日蓮宗の法性寺妙見堂があり、本尊北辰妙見菩薩の信仰をしていたという⁽¹¹⁾。本尊の妙見菩薩が陰陽五行説と結びつき北斗七星をさすことから、号に北斎のほか、辰政、戴斗、雷震などいずれも星に関係する号を用い、終生北斎号にこだわっていること。また彼の生まれ年が辰年であることもその理由となる。

そしてまた北斎が富士山を主題として取り上げたこと。これも関係がありそうである。それは「富嶽三十六景」の後半に甲州道からの富士の眺めをいくつか入れ、末尾に「身延

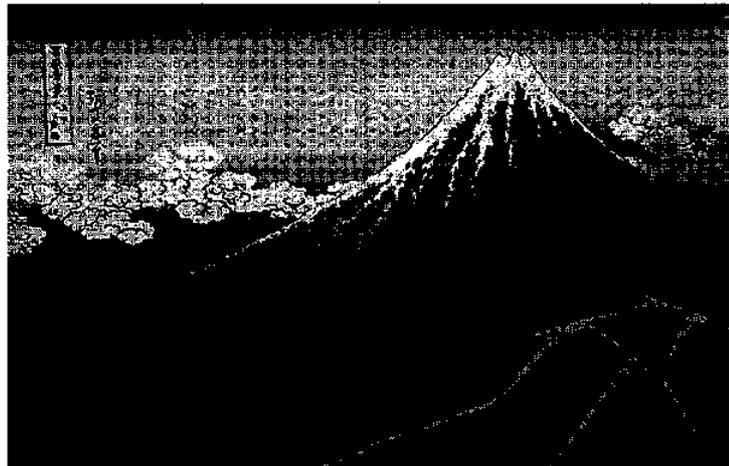


図5 北斎 山下白雨

川裏富士」とあるが、これは本山身延山久遠寺への参詣を示唆しているのではないか。また絵手本「富嶽百景」では「大石寺山中不二」なる絵も存在する。かつて日蓮は富士山を「富士は郡名なり、実名をば大日蓮華山というなり」⁽¹²⁾と「産湯相承事」で述べて、自身と富士山の関係性を明らかにしている。おそらく、富士を描く北斎の胸中にもこの想いがあったのであろう。



図6 島野孝一 早苗田と富士(富士宮市白糸)

歌川広重

広重の場合は30代以降で、ほぼ10年単位の5期に分けることができる⁽¹³⁾。

I期……寛政9（1797）年、江戸八代洲河岸（現在の丸の内2丁目、馬場先門手前明治生命あたり）に定火消同心安藤源右衛門の長男として生まれる。13歳の時、父と母を失い家職を継ぐ。が、浮世絵師の志を捨て切れず、歌川豊広に入門してのち15歳まで。

II期……師匠豊広より歌川広重の画名を与えられ、役者絵、狂歌本、美人画などを手がける。家職を子に譲り、浮世絵師の自覚を深めて後、師匠が亡くなる33歳まで。

III期……二代豊広襲名を辞退し一幽齋、一立齋と名乗り「東都名所」「東海道五十三次」保永堂版、天保4～5（1833～1834）年「近江八景」「木曾街道六十九次」「京都名所」など、次々と名作を生む42歳まで。

IV期……妻の死去後、後妻を迎え「狂歌東海道」「行書東海道」「隸書東海道」など多種類の東海道物を手がける。この間天保の改革があり、出版統制が強化され、町年寄や名主による検閲、訂正が必要となる。遊女、役者絵の一枚物が禁止され、彩色も7～8刷り以下に制限される。柳亭種彦が拘引され、高齢の北斎が信州へ向かうのはこの時からである。広重54歳まで。

V期……養女を迎え、藩の依頼で肉筆作品の制作が増える。「江戸名所」「六十余州名所図会」などを経て還暦を迎え剃髪し「名所江戸百景」を生むが、安政5年（1858）大流行したコレラに罹り62歳で死去する。墓所は曹洞宗東岳寺（現在浅草から足立区へ移転）。

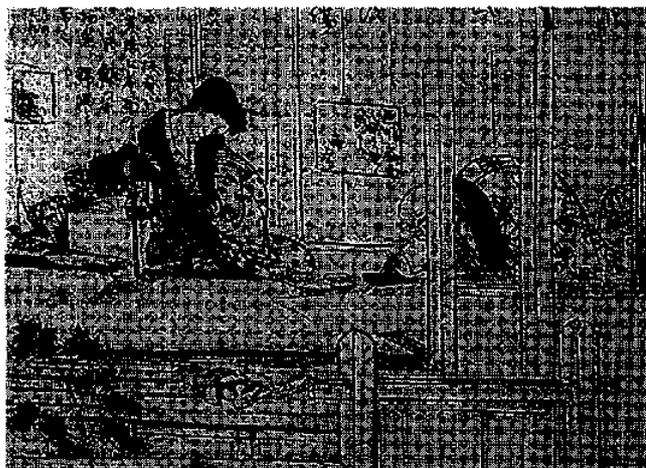


図7 孔彰 北斎翁仮宅写生 国立国会図書館蔵

東海道五十三次

1) 本歌取り

10年ほど前、広重の東海道五十三次には元絵があったというショッキングな出来事が起きた。文政元年（1818）72歳で亡くなった司馬江漢の「東海道五十三次画帖」の出現がそれである⁽¹⁴⁾。（この年広重22歳）全体の順路は逆であるが、たしかに2、3の図を除いて、テーマごとほとんどこの画帖の構図と人物の情景を採ったと以为いいと思う。学界での取り上げ方はクールであるが、まさしくこれが種本として使われたというべきであろう。

近代の陶芸の世界で有名な北大路魯山人に本歌取りという手法の作品がある。収集した古陶磁を学びそれを忠実に写す方法で、古代の和歌の世界でいう本歌取りと同じということの名づけられている⁽¹⁵⁾。一般に絵画ではこれを模写といい、書道では臨書という。学習方法としてこのような方法が古来存在する。西洋でも模写はあるが、模写した本人の署名がない場合に贋作ということ物議をかもすことになる。今日作家の独自性を重視する点で最もホットなテーマであるが、広重の場合、仕上がりで全く印象が異なる点は江漢の油絵原図をはるかに凌ぎ、むしろ見事でさえある。

2) 滑稽味

この保永堂版『東海道五十三次』のもう一つの特色は、描かれた人物の滑稽味溢れる仕草や表情である。「日本橋」の大名行列を急いで避ける魚屋、「川崎」の船中で煙草をふかす乗客、「神奈川」と「御油」の客引き、など枚挙にいとまがない。

広重の生まれた寛政9年(1797)、秋里鎌島の「東海道名所図会」が出版され、享和2年(1802)6歳の時、十返舎一九の「東海道中膝栗毛」の刊行が開始され、この続編を出し続けている中で広重は育っていく。広重の作画の中に両者の影響を見出すことは容易である。江戸時代後半の庶民の楽しみが、お蔭参りや名所見物などによる旅に行き着いていたことがこの背景にある。日常の封建的な束縛から解き放たれて一時の自由を享受する庶民の喜びが、おかしさ(滑稽さ)に示されていると思われる。今日も一般家庭のレジャーのトップが旅行であると報道されているのは興味深いことである。

3) 統制の有無

保永堂版「東海道五十三次」の第1「日本橋」では異版(図8)があり、そこに魚屋の左に異国の人が描かれている⁽¹⁶⁾。江漢の「東海道五十三次画帖」巻末が「日本橋」(図9)であるが、ここに描かれている西洋人と同じである。じつはこれは長崎出島のオランダ商館長一行で、かれらの宿所がこの日本橋のたもとにある長崎屋であったという⁽¹⁷⁾。通常我々が見る「日本橋」には、この異国の人は描かれていない(図10)。なぜこちらの図に変わったのであろうか。

江漢の「東海道五十三次画帖」巻頭では「京都御所」(図11)と記し、御所の前で公家の通過を合掌正座して拝する庶民が描かれている。

広重の末尾「京都」はこれではなく「東海道名所図会」に描く加茂川の南北逆に流れる三条大橋をそのまま模写したものである(図12)。また熱田神宮の「宮」では、江漢は参拝する公家と熱田神宮を描くが、広重は神宮を鳥居でイメージさせ馬追い祭を描く。つまり、江漢には

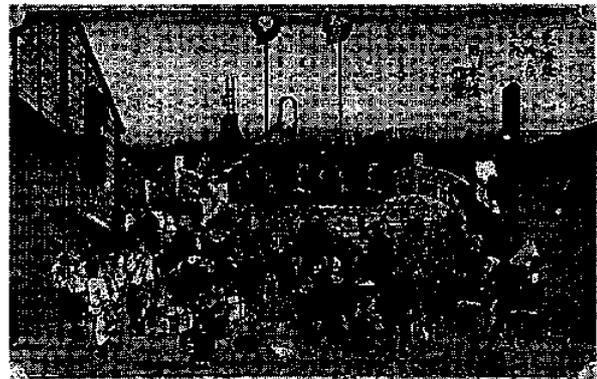


図8 広重 日本橋 保永堂版(異版)



図9 江漢 日本橋

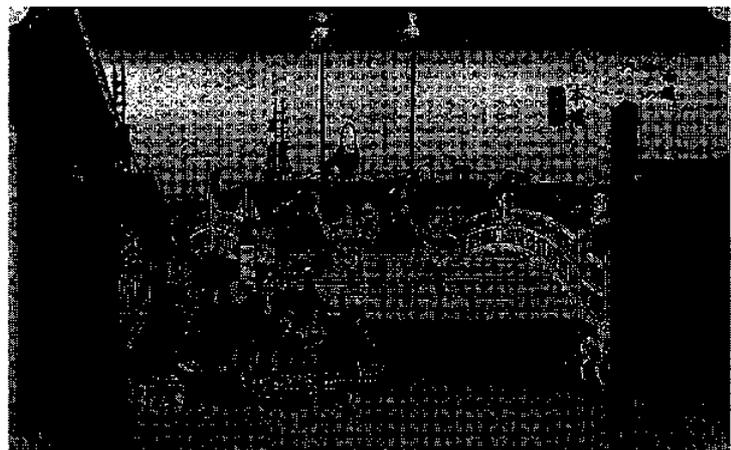


図10 広重 日本橋 保永堂版

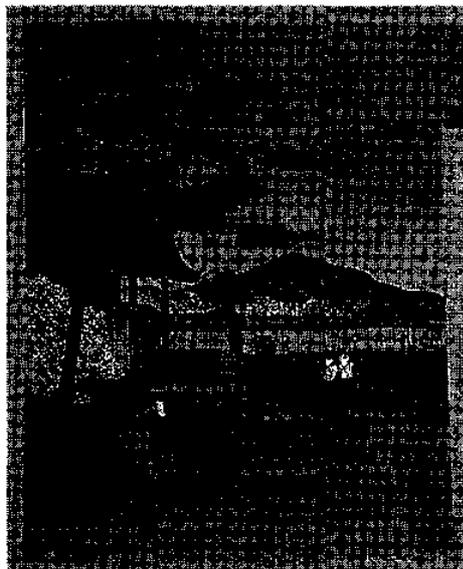


図11 江漢 京都御所

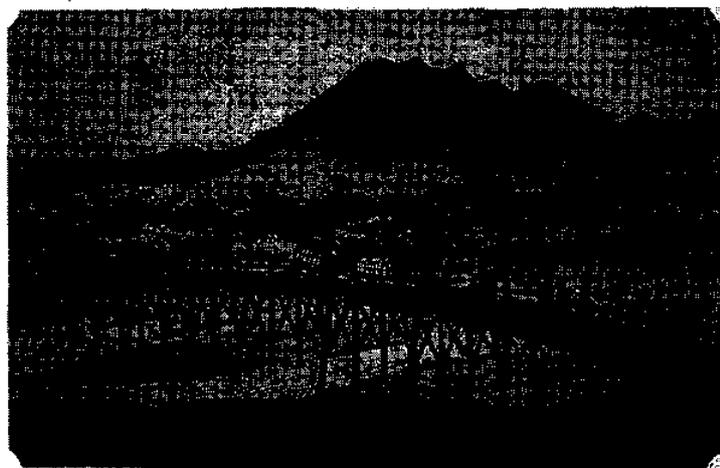


図12 広重 京師 保永堂版

公家社会に対する想い（尊王思想）があり、広重にはそれがわからないことがわかる。したがって、二人には思想上大きな差異があったことをこれらは示している。

もう一つ、広重はその後30種以上の「東海道五十三次」を描いていくが、不思議にあの見事な保永堂版を越える作品は見当たらない。これに次ぐ作品が、9年後の天保13年（1842）の「行書東海道」と、16年後の嘉永2年（1849）の「隸書東海道」である。この三者を「吉田」の作品で比較してみよう。

吉田は今の豊橋で、もと松平氏7万石の城下町であった。保永堂版（図13）はこの城を右手に大きく描き豊川橋を左手に置く。そして城を修繕する足場と職人を入れ、職人の一人が仕事を放り足場に登り橋を遠望する。これは世間を気にせず屈託なく楽しむ光景である。しかし行書版（図14）では、手前に橋と欄干を描き、前方正面川の上に城を描き、そして城の奥に山、左に人家と帆船、橋の上に武家と商人4人を添え

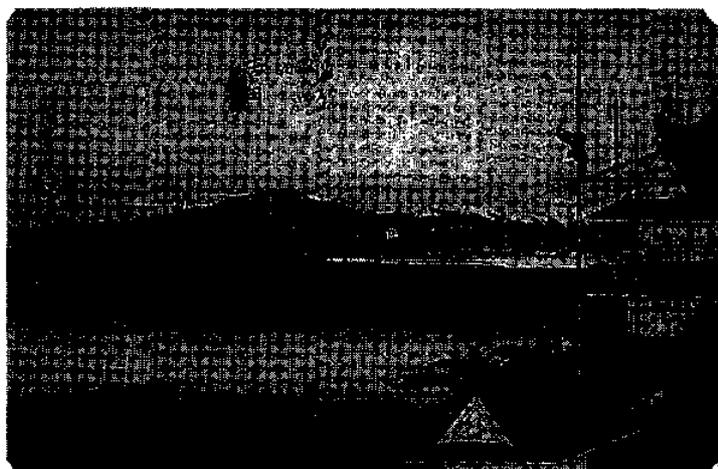


図13 広重 吉田 保永堂版



図14 広重 吉田 行書版



図15 広重 吉田 隸書版

ているが、全体に面白味を感じさせない平板な風景である。隷書版（図15）では、右上方に石垣を描き城をイメージさせ、牛頭天王の武家装束の祭りを描く。庶民はゴザを敷いて行儀よく見物している。が、これは寛政版『東海道名所図会』の、全くの模写であった。したがって、この三者の比較でも後者になるほど平板で、ありきたりなものになり、次第に自由さがなくなっていくように思われる。広重が何か武家の支配に対し距離を置いていく様子に見えるが、これはおそらく江戸幕府の庶民に対する統制が、天保の改革で一層厳しくなり、彼において幕府権力に対する畏怖の念がしだいに増大していったためとみるべきであろう。

結 び

一般に北斎と広重は、多作の故にマンネリ化に陥り、そのため以後優れた作品を生まなかったとされているが、おそらくそれだけの理由ではないであろう。時期をほぼ同じくして生まれた二人の傑作「富嶽三十六景」や「東海道五十三次」（保永堂版）では、二人が大自然と人々の描写において極めて優れた能力を発揮し、その実力のあることを見事に証明した。これはその時点において、自由な表現が許されていたことを示しているといえよう。が、その後の二人の作品に、傑作があまり生まれていないということから考えると、二人は封建制身分社会における上からの抑圧で、その時まで許されていた自由な表現が許されなくなり、しだいに精神（思想）の自由を奪われていったためとみなしなければならない。この眼に見えない精神の自由の大切さを、21世紀に生きる我々もまた、十分承知しておく必要があるであろう。

- 図1 北斎「神奈川沖波裏」東京富士美術館（同館絵葉書）
- 図2 田代博「横浜市中区の富士見町からの富士山」（『富士山』新潮社 1985）
- 図3 北斎「颯風快晴」東京富士美術館（同館絵葉書）
- 図4 絵葉書「冬の忍野の富士」
- 図5 北斎「山下白雨」東京富士美術館（同館絵葉書）
- 図6 島野孝一「早苗田と富士」富士宮市白糸（NHK 写真展絵葉書）
- 図7 孔彰「北斎翁仮宅写生」国立国会図書館（上注11熊本著）
- 図8 広重「日本橋」異版 豊橋市二川宿本陣資料館（豊橋市美術博物館『歴史の道東海道展』図録2001）
- 図9 江漢「日本橋」（司馬江漢『東海道五十三次画帖』ワイズ出版1996）
- 図10 広重「日本橋」東海銀行（富士美術館『広重の旅展』図録 1979）
- 図11 江漢「京都御所」（上図9に同じ）
- 図12 広重「京師」保永堂版 東京富士美術館（同館絵葉書）
- 図13 広重「吉田」保永堂版（上図10に同じ）
- 図14 広重「吉田」行書版（上図10に同じ）
- 図15 広重「吉田」隷書版（上図10に同じ）

付

本稿は2001年8月25日に創価大学で行われた、第29回夏季大学講座の講義内容をまとめたものである。

注

(1) 小林忠ほか『浮世絵の歴史』美術出版社 1998

- (2) 平木浮世絵美術館「北斎と広重」平木浮世絵財団 2001
- (3) 荒井勉「新訳北斎伝」信濃毎日新聞社 1998
- (4) 近藤市太郎「北斎富嶽三十六景」平凡社 1960
- (5) 同上4, 永田生慈「葛飾北斎」吉川弘文館 2000
- (6) 柳亭種彦「正本製」1831, 同上5
- (7) 同上4
- (8) 同上4
- (9) 菊地貞夫「北斎」至文堂 1972
- (10) 飯島虚心「葛飾北斎伝」(初版1893) 岩波文庫 1999
- (11) 斎藤月岑「増補浮世絵類考」(初版1889) 岩波文庫 1941, 同上10, 熊本高工「巨星葛飾北斎」日本文教出版 1999, 諏訪春雄「北斎の謎を解く」吉川弘文館 2001
- (12) 「日蓮大聖人御書全集」創価学会 1953, 松岡祐治「富士と日蓮大聖人」暁洲舎 1987
- (13) 近藤市太郎「広重東海道五十三次」平凡社 1960
- (14) 対中如雲監修・司馬江漢「東海道五十三次画帖」ワイズ出版 1996
- (15) 「魯山人の愉しみ」講談社 1979
- (16) 内田実「広重」岩波書店 1930, 豊橋市美術博物館・中日新聞社「歴史の道東海道展」カタログ 2001
- (17) 同上14

The Background of Hokusai and Hiroshige's Masterpieces

Mitsuru KOYAMA

This paper is about the background of the *Fugaku Sanjurokkei* (Thirty-six Scenes of Mount Fuji) by Katsushika Hokusai and the *Tokaido Gojusantsugi* (Fifty-three Stations of the Tokaido Highway) by Utagawa Hiroshige.

The 90 years of Hokusai's life can be divided into five periods, four periods of 20 years followed by the last 10 years.

His best work, *Thirty-six Scenes of Mount Fuji*, is characterized by the following three points :

- 1) New ideas resulting in new techniques
- 2) Representation of real scenes
- 3) Belief in Nichiren Buddhism

We can also divide the 62 years of Hiroshige's life in five periods. First two periods before he reached the age of 30, then three more periods.

Hiroshige's best work, *Fifty-three Stations of the Tokaido Highway*, can be characterized by the following three points :

- 1) It is based on real scenes
- 2) The behavior of people is represented with a lot of humor
- 3) The artist expresses his ideas free of interference from the government

The two masterpieces mentioned above were created during the same period. Hokusai and Hiroshige tried to produce even better art. but they were unable to do so. The reason is that the pressure from the government (Edo Bakufu) was so strong that they could not create finer works than these two.